**富本銭**

古墳時代（約250〜552年）までに、日本と他のアジア諸国との貿易はかなり進んでいました。日本人はこの貿易を利用して、独自の技術を進歩させながらノウハウを習得・発展させました。 藤岡は、富本銭硬貨が発見された日本で最も東に位置する場所です。中国のモデルを元にした金属製のコインで、真ん中に穴が開いています（現在の日本の5円や50円硬貨とは異なります）。また、硬貨には "七日の星 "と呼ばれる七つの点の六角形が描かれています。点は陰と陽（太陽と月）と5つの自然要素（火、水、木、金属、土）を表しています。日本では、これらの7つの要素は、週の7日間に使用される漢字でも連続して表されます。

硬貨は主に銅でできており、銀と蒼鉛の痕跡があります。学者たちは、硬貨が通貨として使用されたのか、それとも単なるお守りであったのかを議論しています。もし通貨として使用されていたならば、それらは日本で使用された最も古いお金になります。

**須恵器**

須恵器は、古墳時代に朝鮮半島からの入植者によって日本に伝わった青灰色の焼き物です。それ以前の時代と同じように、粘土の束を所望の壺の形に巻いて、その形の表面を叩いて滑らかにしたものが作られていました。須恵器で使用される焼成技術は以前より高度で、比較的密閉された窯とより高い焼成温度（1,000°C）を使用していました。

須恵器の生産が始まったとき、焼き付け技術はまだ知られていませんでした。焼成中に偶然灰が溶けて釉薬のような表面になることもあります。

このスタイルで働く陶芸家は、丈夫な屋根瓦やさまざまな日用品を生産しました。

博物館の須恵器のコレクションは、主に平安時代（794〜1185）にまでさかのぼります。他にも、中国から輸入した青磁釉の鉢の破片など、平安時代の土器が展示されています。

**金属の遺物**

博物館には、平安時代の金属工芸品もいくつかあります。ディスプレイで重要なのは、鍬の先端部分であった馬蹄形の金属片です（その道具の残りの部分は木製でした）。他にも斧の刃、鎌の刃、紡錘の渦巻きなど、当時の道具があります。

**城跡**

室町時代（1336〜1573）、藤岡は地域防衛の重要な中心地であり、多くの城跡が残っています。この時代の日本の城は、主に陣地の土塁を築造したもので、周囲を海溝のような乾いた堀で囲まれていることが多かったです。

15世紀半ばに築かれた平井城跡と金山城跡は、このタイプの城の例です。平井城はやや丘の上に建てられ、金山城は山頂の要塞であり、敵の接近を監視することができました。両方の城は16世紀半ばまでに使用されなくなりました。